（様式1）

令和3年度　学力向上指導改善プラン

弥生小学校長　　朝倉　美穂

学校教育目標	自ら学び　たくましく　心豊かな弥生っ子の育成
推進主体	管理職と主幹教諭・教務主任・研究推進担当・生徒指導担当・新学習システム推進委員を中心に学力向上委員会を設置し、以下の取り組みを実施。

		学力に関する前年度の状況・経年の課題等	4月 学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標（指標となる数値等）	具体的な行動目標（成果目標達成のための具体的な手立て等）	2～3月 年度末評価（今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
学力の状況	これまでの全国学力・学習状況調査結果の状況（教科に関する質問紙調査の結果も含む）	○「目的に応じて、文章の内容を押さえながら要旨を捉えること」「漢字を正しく読んだり書いたりすること」は概ねできている。 ○「相手にわかりやすく伝える記述の工夫」「目的意図に応じて自分の考えの理由を明確にまとめて書くこと」は、全国平均を上回っており、学習の定着がうかがえる。 ◆「話し手の意図を捉えながら聞き、自分の考えをまとめる」は、全国平均を下回っており、課題がある。 ○小数や分数の計算を含め、四則計算の技能は身についている。 ○計算等の手続き的知識や基本的な記号・用語の意味は概ね理解できている。 ○数量や図形の技能は、概ね身についている。 ◆理由や説明を記述する設問で、必要な条件が抜けており、問題解決の方法を具体的に説明する力に課題がある。 ◆複数の数量から必要なものを選び、立式する力に課題がある。 ○算数の問題にあきらめずに取り組んだり、他の方法を考えたりする児童が全国平均を上回っており、粘り強く取り組む姿勢が伺える。 ◆自尊感情が少し低く、失敗を恐れて自信が持てない傾向がある。 ◆授業時間以外での日常的な読書や図書室・図書館利用の習慣がついていない児童が全国平均より多く、課題がある。	○学習の成果や成果物（説明文・新聞等）を主体的に交流する機会を増やす。 ○「話し手の意図を捉えながら聞き、自分の考えをまとめる」ことのできる児童の割合を昨年度以上にする。	①ワークシートや思考ツール等を活用しながら、整理して書くこと、自分の思いや友だちの意見に関連付けて書くことを取り入れた学習活動の充実を図る。 ②何のために（目的意識）、誰が（相手意識）、条件や場面に合わせる（状況意識）、表現方法（方法意識）の観点で、聞く活動とともに書く活動を充実させていく。 ③文章の内容の構成の工夫や表現内容の根拠を明確にするなど作文の質を向上させる活動を充実させていく。	①「よくできた」38%、「できた」62%。全教職員が文章と図表を結びつけて必要な情報を見つける力を身につけさせる学習活動を行うことができた。 ②「よくできた」8%、「できた」92%。児童の伝え合う力を育てるために、五つの言語意識を持って日々の授業を実践したが、評価の観点について教師と子どもが共有していくことが重要であると分かった。 ③「よくできた」15%、「できた」85%。文書の構成を工夫したり、根拠を明確にして登場人物の気持ちをまとめたり、整理したりする活動やミライシードを使った学習で資料や写真など視覚的な効果を活かして説明や発表を行う経験が増えたが、更に書く内容の精選や校正をしてより良い文章にしてく等の発展的課題を提示し、取り組む事が必要である。	B
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）	○既習内容をどの程度理解しているのか、単元ごとにテストを実施し、未定着の児童には同じ問題や似た問題に取り組ませる等して定着するまで個別指導を行っている。（経年）	○文章題の内容を理解して必要な数量を選び、正確に立式できる児童の割合を昨年度以上にする。 ○問題解決のために、必要な条件を入れて具体的に説明できる児童の割合を昨年度以上にする。	④算数チャレンジタイムで、基礎的・基本的な知識や技能の向上を図る。 ⑤「めあて」「振り返り」の定着、「ペアトーク」「グループトーク」による問題解決等の授業に取り組む。 ⑥立式の際には、式の意味を考え、ノートにまとめていくなど、自分の考えを見える化していく。 ⑦問題文から、何を問われているのか、どの数量が必要なのかを考えるために、問題文の重要な部分に線を引くなど、条件を整理する活動を取り入れる。 ⑧少人数授業では、児童の興味・関心や課題意識によって分割したり、学期末や年度末には学習進度によって分割したりするなどの工夫をする。	④「よくできた」23%、「できた」77%。算数チャレンジタイムを継続的に行うことで、基礎的・基本的な知識技能の定着が図れている。 ⑤「よくできた」69%、「できた」31%。「めあて」「振り返り」の定着はできている。「ペアトーク」「グループトーク」などの学習形態を活用した問題解決学習については、コロナ禍の中で、短時間にするなど工夫しながら取り組めた。 ⑥「よくできた」31%、「できた」69%。頭の中では理解していても、ノートに書く、説明するとなると言葉が上手く出てこない児童がいる。語彙力の向上など、国語との連携が必要である。タブレットを活用することで、クラスでの意見交流ができ、思考の手助けとなっている。 ⑦どの学年でも評価問題を解くために必要な部分に線を引くことで、式を立てるときの手助けとなっている。 ⑧「よくできた」38%、「できた」62%。年度末のまとめ学習では、6年生が「みんなが分かる」「みんなで分かり合う」ために復習問題を説明する見本を示してくれたものを校内掲示した。このような学習を広げていく。	B
	授業等からうかがえる状況（各教科）	○高学年の教科担任制・少人数指導・週1回放課後の「がんばりタイム」の実施は、児童の学習意欲向上につながっている。 ○「話し方」「聞き方」の学校のスタンダードを作成して教室前面に掲示し、どの児童にも身につくよう指導している。	○読書活動の充実	⑨学校司書と連携し、学年に応じた読み物や学習関連図書の紹介、ビブリオバトル等を行う。 ⑩朝の読書タイムを週2回設定し、図書委員会や図書ボランティアによるブックトークや読み聞かせ等を実施する。 ⑪毎月23日を「弥生読書の日」として設定し、家庭への啓発とともに、家族読書の日としての定着を目指す。 ⑫「読書通帳」を積極的に活用し、1冊達成ごとに表彰する。	⑨「よくできた」100%。学校司書と担任が連携し、調べ学習に必要な資料や書籍を揃えたり学年に応じた読み物や学習関連図書の紹介を行ったりする等、各教科の学びの充実を図ることができた。 ⑩「よくできた」100%。ビブリオバトルや表紙を活かした図書紹介を行い、本の選び方や発表の仕方について、学校司書からアドバイスをもらった学年もあった。ビブリオバトルで友だちが紹介した本を読む等、読書への意欲が高まった。 ⑪「よくできた」15%「できた」85%。児童保護者アンケート結果『本をよく読みますか』全校児童「はい」「どちらかというとはい」評価63%。同様の保護者評価66%。コロナ禍で読み聞かせボランティアが定期的に来校できない時期があったのが残念である。普段の読書習慣につながる活動を探る。 ⑫「よくできた」54%、「できた」46%。読書通帳表彰は、33人49枚。国語の発展学習として多読につながる活動を取り入れるなどの工夫を凝らす。	A
学力向上に係る生活習慣・学習状況等の学習	学校評価などのアンケート調査やこれまでの全国学力・学習状況調査の質問紙の経年変化による児童・生徒の状況	○朝食をとる、早寝早起きをしている児童が多いことから、概ね落ち着いた家庭生活を送れていると言える。 ◆家庭での仕事の習慣、主体的な学習習慣については課題がある。（経年） ○地域行事には積極的に参加しており、地域や社会に関心を持って新聞を読む児童や、ボランティア活動に参加したことがある児童もいる。	○「早寝早起き」「朝食」等の健康的な生活習慣の定着 ○家庭での仕事や手伝いの継続による生活的自立や自己肯定感の育成 ○主体的な学習習慣の定着	⑬学級活動や保健等の学習、長期休み期間の宿題等で、早寝早起きや朝食をとる習慣づくりにつながる取り組みを実施する。 ⑭生活科や学級活動等の学習、長期休み期間の宿題等を通して、生活をより良くしようとする実践力を養う。 ⑮各教科の学習において、主体的に学びに向かう力や問題解決能力を育成する。 ⑯復習や調べ学習等、宿題内容を工夫する。	⑬「よくできた」8%、「できた」92%。児童保護者アンケート結果『朝ごはんを食べていますか』全校児童「はい」「どちらかというとはい」評価96%、同様の保護者評価100%。児童アンケート結果が昨年度より3ポイント減少している。細やかな児童の様子観察を継続していく。『早寝早起きができていますか』全校児童「はい」「どちらかというとはい」評価80%、同様の保護者評価75%。学年が上がるにしたがって寝る時間が遅くなる傾向にある。ゲームやスマホ等の使用時間が数時間に及ぶ児童もおり、情報機器の使用ルールも含めた啓発を、児童だけでなく保護者に向けても行っていく必要がある。 ⑭「よくできた」8%、「できた」92%。児童保護者アンケート結果『お手伝いや家の仕事をしていますか』全校児童「はい」「どちらかというとはい」評価85%、同様の保護者評価79%。家の仕事については、生活科での学習や長期休み期間の全学年宿題等で、一定の啓発はでき、保護者からも肯定的な評価を得た。家庭による差や習慣づくりに工夫が必要である。 ⑮「よくできた」15%、「できた」85%。今後も継続して、各教科特有の知識や技能を習得させながら、主体的に学びに向かう力や問題解決能力を育成する。 ⑯「よくできた」15%、「できた」85%。児童保護者アンケート結果『進んで宿題や調べ学習をしていますか』全校児童「はい」「どちらかというとはい」評価83%、同様の保護者評価75%。今後も学年に応じて、自主学習や調べ学習、タブレットを使った学習について、工夫しながら取り組んでいく。	A
校内研究・研修の状況	校内研究の状況	○「思考を広げたり深めたりするための思考ツール」の活用によって、話し合い活動が活性化し、思考力や表現力の高まりが感じられた。また、朝学習で思考ツールの使い方を習得する時間を設定することで、どの学習でどの思考ツールがつかえるのか子ども自身も理解することができた。国語科、社会科、道徳科など他教科でも幅広く効果的に使用することができた。 ◆「思考ツール」（ピラミッドチャート・PMIシート・フィッシュ―ボーン図など）の有効性については、探究活動を深める一定の成果と活用方法が明確になってきたが、一人ひとりの学びがどう深まっているのか、思考がつながっているのかに関しては、まだまだ検証できていない。	○校内研究において、『仲間とかかわり合いながら、よりよく生きようとする子ども～学びが見える学習をめざして～』のテーマに沿った研究の推進	○地域の「人・もの・こと」とつながる活動を仕組んで実践する。（カリキュラムの再構築） ○「思考ツール」を活用した授業実践に取り組む。	⑰人と自然の博物館研究員との連携授業、校内研究に継続指導・助言いただいている講師招聘により、協働的・探究的な学習の研究を推進する。 ⑱思考ツールや新聞を活用した朝学習《おはようチャレンジタイム》を実施する。 ⑲見合い授業で授業力の向上を図るとともに、ユニバーサルな視点を取り入れて「弥生っ子スタンダード」授業の構築を目指す。 ⑳一人一回以上の研究授業を実施する。 ㉑研究授業では、事前の検討会で授業の視点を決め、事後研修会を実施する。	⑰「よくできた」100%。学年や教科、課題教育、地域の方とのつながりを継続しながらよりよく生きる力を育成していることを、外部講師の先生方に認めていただけた。 ⑱「よくできた」100%。他教科でも学びが見えるツールで児童の思考力向上や意見交流で成果が見られた。また、ミライシードを使って、学年を越えて意見交流できる機会を設定できた。 ⑲「よくできた」8%、「できた」92%。各教科で互いの授業を「見合い週間」と位置づけ年間1回しか実践できなかった。全職員が授業や児童の様子を把握する有効な手立てとして継続していく。 ⑳「よくできた」31%、「できた」69%。専科や養護教諭などの実践も校内授業研究に取り込めるように考える。 ㉑「よくできた」46%、「できた」54%。ふるさと弥生への思いを「人、もの、こと（自然）」から自分たちで学び深めていけるように取り組みを進めていきながら、新たな視点を取り入れた単元づくりについても研究を深めていく。	A
	校内研修の状況	○見合い週間や思考ツール交流会などで、授業づくりやカリキュラムマネジメントについて学びを深めることができた。 ◆研究授業前の事前検討会を充実させ、授業実践の共有化をさらに図ることが課題である。					
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況	○◆『放課後子ども教室』の実施は、地域に子どもの居場所が位置付けられることにつながっている。学校支援ボランティアの活動も定着し、児童も地域の中で育っていることを自覚している。学校・家庭・地域で目標を共有し、相互補完の取り組みをさらに進めていくことが課題である。	○ふるさと弥生を愛し、たくましく生きる子どもの育成	○学校・家庭・地域の連携強化を図る。（コミュニティ・スクールの推進）	㉒「学び」「心」「元気」「安全・安心」をキーワードに学校・保護者・地域の役割分担と連携を明確にし、それらの実践と検証を行う。	㉒「よくできた」15%、「できた」85%。今年度もコロナ禍により、様々な制限がかかった中での活動となったが、地域（弥生が丘自治会）と連携し、時期や内容を検討しながら推進することができた、子どもたちにも「地域の一員」としての自覚が芽生え、ふるさと弥生を愛する心の醸成につながっている。WITHコロナをふまえつつ、さらに学校・地域・保護者の連携を考え次年度の実施内容を検討していく。	B
	小・中における教科連携等の状況	○◆各学期に1回、富士中校区の4校校長会を実施している。各校の情報交換や小中連携について話し合うことができた。ここでの方針を受けて、年3回の幼小中特連絡協議会を実施できたことは大きな成果である。今年度も関係学校園所が連携し、着実に進めていきたい。	○目指す児童像を共有した学校園所連携の推進	○児童生徒交流部会を年2回開催し、幼・小・中が連携した事業を推進する。 ○幼小中特連絡交流会を年3回実施し、前年度の成果と課題を受けた取り組みを推進する。	㉓児童生徒間交流部会では、あいさつ運動、クリーン作戦等を推進する。 ㉔幼小中特連絡交流会では、研修会、研究授業、幼小連携・小中連携等の企画実践を推進する。	㉓「よくできた」8%、「できた」92%。毎月25日に「にこにこデー」を実施し、計画委員会を中心に啓発できた。校舎内だけでなく、登下校中においても、地域の方に元気な挨拶ができる子どもが増えた。また、横断幕を移動させ保護者や地域への啓発となっている。クリーン作戦は、推進することができなかった。 ㉔「よくできた」0%、「できた」100%。年2回の小中連携交流会（オンライン）を持つことができた。コロナ対策・児童生徒の様子・各校の特徴的な取り組み等についての情報交換ができた。Zoomで開催することで、新しい形での実施が斬新であり、子どもたちにも良い経験となった。今後も、中学校区で交流し生徒指導面や学習面においても共有しながら進める。	B